

# 園外保育日記

大正八年十月二十七日

## 京都市日彰幼稚園

附言

本園は幼児の屋外遊戯場の特設なく、學校と共用なるが故に、自然屋内に於て多く遊ぶことになる。其の暇を調和するために園外保育を度々行ふ。一二三六七月の間は出ることは極めて少いが、其の他の季節は、殆ど、一週に平均二回位は出て、而して自然界に近づけるを常とす。辨當持は年二回位にして其の外は午前中に行つて歸ることにして居る。

目的 豆の蒔種をかねての遠足。

場所 平野衣笠山の麓。

幼児數 八十五名、保姆六名

用意 前日より水につけ用意せし豆、そら豆三合

豌豆三合、その他、急求療用の品々、少々

午前九時出門の豫定であつた。兒供は、八時前後に早や三々五々集ひて、保姆の顔を見て、「ち早う」とんで来る。辨當は背におひ、お菓子には腰にぶら下げて、勇んで居る。時刻迄にはすつかり揃つたので列を整へて出門する。烏丸蛸薬師に至り、豫定通り九時三十分電車の都合ついたので、直ちに乘

車す。例の如く車を買切にする。子供は練れたことして、一二分間に皆乗り終る。半は腰掛の上に昇らせて立たせ、半は腰掛させる。種々談笑の内に千本今出川に着く。下車して、列をそろへて、北へと進む。約五六町にて、北野神社に至る。一同列んで禮拜す。境内を横ぎりて、北門を出て、此度は平野神社をも伏し拜み、社内に飼養する一匹の大猿に近寄り、お菓子など與へたけれども食べてくれぬので、本意なさそうに、尙ほも、種々の言葉をあびせても平氣なのに興うすく、そこを辭して、又も北へと進む。町はづれに來るといろう／＼の畑物を見ては、「これ何／＼」と問を連發する。「あゝあそこに、大根が生えてる。」「ほんに大根ですわね。」「又もこれは先生何です。」「と聞く「それは牛蒡です」と、「ふんごんぼか」など云ふ。「いゝえごぼうといふのです」と教へらるゝものもある。そうかと思ふと、「これは先生?」と尋ねる。「それは、おんじんやわ」と教へ居る兒もある。「それは人蔘と云ふのですよ」と直してやつて居る先生もある。「私、あの山に上り度いなあ」と云ふ兒、「私此の間、うちから皆と松茸狩りに行つてたくさんとつたわ、あの山は金閣寺山や」と自慢話をし

て居るものもある。「そう／＼あの山は衣笠山といつて、松がたくさん生えてゐるから、松茸が生へて居たてせうね」などと話しながら、四五町の途を來てしまつた。目的の場所は學區内の分力者の別荘で、有志を以て花畑の一隅を借してもらつて、昨年來豆を試植したのである。立派な庭園をなす。今日は豫ねて園兒の來るを待ち受けらるることにて、庭の此處彼處には、うすべりや腰掛を出して下され、お茶の用意など意を用ゐて下さつた。一先づ背のお辨當を下ろさせて暫く休息させる。庭園中は秋の草花が咲き匂ふてゐる。ダリヤ、コスモス其他名も得知らぬ西洋花のかず／＼、赤や白や、むらさきこきませて、咲き亂れてゐる。兒も異句同音に、「あゝきれいやな」「何ちう花やろ」などと云ひかはして、暫らくはあちこち眺めて居た。「お晝には、まだ一時間ほど間があるから、田甫を散歩して來ませう」と云ひ、打ち連れ立つて出かける。天高く水清らかにすみて、小川の魚も心地よげにおどつてゐる。見渡す限り黄金のむしる敷きたらん如く、秋風をよぐにつれてサラサラと稻穂の音ものどけさ限りなし。先づ一興なりしは、所々に立てる案山子であつた。新聞紙にて丸く

顔をこしらへて、子供の樂書きの様な顔付きを描きであり、其の様がおかしく、皆一度に大笑す。それからお米に就いて話す。「これがお米です、ね、皆さんよく知つてゐるでせう、そら皆さんのお遊戯にするお百姓さんのまね、ね、(土川先生作リズム的)向ふに刈つて柯に掛けてあるのがあつてせう、鎌でこうして切つて、日に干して、乾いたのを稻扱で扱き落してそれどうするのです?、そう／＼こうしてね、それを此度は白で引いてあの皮をはいで中から白いお米が出るのです、ね、ですから充分力が入るでせう、それから、彼の黒い方がお餅にするので黄なのがごはんにするのですよ、」など説明する中に一人二人一寸稻穂をとつて來て「先生これ」と持つて來るので大事件のやうに、不可なることを訓誡すれば得心して、そつと捨て、しまふ。わら天神と云ふ神社を拜して尙ほも北の方へと行く。途々野菊やコンペイト花などを摘む。兒は彼の先きの山へ上らうと希望する者多く、「兎に角く麓まで行つて見ませう」とて歩を早めて進む。五六町も來たかと思ふのに、中々其所迄に行きつげざるため、つひに中止して、其の更りに、金閣寺へ行く事に一決す。此所は金閣寺裏手になる

ので細い山道である道程も分らぬけれども、たかをくくつて進んで行く toward 向ふから一人若者が來たので尋ねた。すると「こゝからは中々道も遠くて、其の上山道でとても子供さんの足では行けません」との事それで皆あきらめて此の次に行くことを約して引き返すことにした。唱歌しながら別荘へと歸り着いた。すると、校長も來て居られてニコニコと待ち受けられた。「實は、さきに來て、皆さんが居ないから金閣寺へでも行かれたのだと思つてお向ひに行つたけれども一向見えなかつたが何處へ行つてらしたの」との御尋ねに前のお話をして笑ふ。

丁度時分時であつたから、廣い美しい座敷へ案内せられて其所でも辨當を食べることにした。向ひ合ひの二行に列んで、母様の御心づくしの辨當を開いて、「まあがりなさい」「頂きます」の挨拶のもとに箸をとり上げてさもく「お甘しそうに食べる様がいぢらしかつた。お茶は食後に與へることに習慣してあるから、誰一人お茶を要求する者はない。保姆も共に食し終る。後には折箱も竹の皮も一まとめに成して、飯粒一つも目につかぬも心うれしき一つであつた。食後お菓子などを食べて可なりお茶が賣れた、

暫く休憩して目的の豆の種を蒔かせた。四間の長方形にこしらへた畑を、長く二列に兒數程の凹をつけて置き、幼兒にはそれ／＼豆を分配しやる。そら豆は二粒づつ、豌豆は五粒づつ、それに各々の名を書いた立札を持たせ、向ひ合せに列ばせて、穴へと蒔かせ其の上に摺り糠でおほはせ、土をきせて、立札を立てさせ終る。「何時豆の木が生えますの」と尋ねる兒もある。「そうね大方三十程寝ると芽が出ますから、其時又見に來ませう楽しみですね、今暫らく遊びませうといつて、鬼ごつこ、かくれんぼをなし、池の鯉に荻をやつたりなどしてあかず遊んだ。二時半に電車に乗る筈なればと、二時を合圖に列を整へて當莊主に御禮の挨拶すませで、歸途に就く。無事歸園することが出來た。しほれかゝつた花束を大事そうにお土産にと持つてゐる兒もあつた。さよなら御機嫌良の挨拶に別れたのは正に三時であつた。其の日の徒歩せしは約往復で三十町、野外散歩せしものが約十町であつた。其の翌日兒の所感を尋ねたるに、

最もおもしろかつたのは花摘み、案山子、うれしかつた事はお辨當を食べる事、豆を植えるのがうれしかつたと云ひし者一人尙ほ其の日歸宅後晝寝せしもの七八名なりしと。